

くるみくぼ

胡桃窪遺跡(本発掘調査B)

所在地 北設楽郡設楽町大名倉字胡桃窪・丸山
(北緯35度06分13秒 東経137度33分10秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 令和2年5月～令和2年10月

調査面積 2,825㎡

担当者 鈴木正貴・鈴木恵介・渡邊 峻



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 調査は国土交通省設楽ダム工事事務所による設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、愛知県県民文化局の委託を受けて令和2年5月から令和2年10月にかけて実施した。調査対象地の現況は造成された旧耕作地である。近代の耕作土および床土を表土掘削により除去した後に検出を行い、縄文時代の竪穴建物跡、平安時代の竪穴状遺構等の遺構を検出した。調査面積は2,825㎡である。

立地と環境 胡桃窪遺跡は寒狭川(豊川)左岸河岸段丘上の南西方向に下る斜面から下位の河川敷部分にかけて立地する。寒狭川は鷹ノ巣山(段戸山)に発し、大名倉周辺ではおおそ南東方向に流れるが、胡桃窪遺跡付近より大きく蛇行し、下流約1kmで境川と合流する。同じ寒狭川下流側には大名倉丸山遺跡、上流側にはハラビ平遺跡が確認されている。

調査区が立地する南西向きの斜面は幅約150mで、北西側は寒狭川による段丘崖となり、南東側は沢によって削られた崖となっている。遺跡周辺の南向きの斜面では、胡桃窪遺跡付近は比較的傾斜が緩く、まとまった面積が確保できるため水田や畑地、河川敷部分では製材所が営まれていた。

本調査に先立つ平成27年度に範囲確認調査が実施されており、この結果に基づいて県道瀬戸設楽線を挟んだ斜面部分が調査区として設定された。調査の都合上、県道南側をA区。北側をB区とした。地表面の標高は、最も低いA区側で415m、最も高いB区最上位部分では431mである。

調査の概要 調査は県道瀬戸設楽線の南側に設定されたA区より着手した。A区の調査前の現況は造成された水田であり、旧地形は北東から南西に下る斜面である。現代の水田の造成にあたっては、斜面上位側を削平し、その土砂を斜面下位側に盛る方法で平坦面を構築している。B区も含めた胡桃窪遺跡内の全体で同様の方法が採られている。そのため、旧地形の斜面上位側では削平によって遺構が滅失し、斜面下位側は盛り土によって遺構が残存する。ただし残存する遺構についても、植生等の影響によって表土が流出、攪乱されているため残り方は良好ではない。A区では小型の土坑状遺構を多く検出し、B区ではこれに加えて縄文時代前期後半・中期後半の竪穴建物跡それぞれ1基を、平安時代中期の竪穴状遺構2基を検出した。

A区の遺構 A区内では、水田造成のため削平を受けた面積の調査区に占める割合が大きく、盛り土を除去した検出面は地山を切り出した面となり、検出された土坑状のものでも植生痕などが多く見られた。柱痕跡状の断面を持つ土坑は、003・043SKの2基が確認されたが、建物等に関わるとは考え難く、耕作に関わる稲木などを想定すべきと考える。時期は近世以降。範囲確認調査では灰釉陶器の破片も検出されていたが、これらは近世段階の耕作土

に混入していたものと見られる。

B区の遺構 B区の現況は、下部の大きく造成された水田3段、最上位の畑地1段よりなる。遺構が多く検出されたのは、上から2段目、3段目である。2段目では縄文時代前期後半の竪穴建物跡111SI、平安時代中期の竪穴状遺構100SIが検出された。3段目では縄文時代中期後半の300SI・399SI、平安時代の竪穴状遺構302SIが検出された。

竪穴建物跡 111SI 竪穴建物跡111SIは、長軸3.61m、短軸3.06m、検出面からの深さ0.51mを測る。平面形状は楕円形に近い。斜面下位側が斜めに削平された状況のため、斜面上位（北東）側では掘方が深く残り斜面下位側は掘方がほぼ無い状況である。床面はほぼ水平だが北角部がわずかに高い。壁面は長軸方向である北西・南東側は緩やかに立ち上がり、短軸方向の北東側壁面は急に立ち上がっている。炉跡は161SLが検出されたが、炭化物を含む程度で明確な被熱は見られない。竪穴建物跡埋土より晴ヶ峯式土器（長野県）に類似する土器が出土し、これにより111SIの年代を縄文時代前期後半とした。

土坑162SK 111SI内の土坑162SKは、黒曜石・溶凝灰岩の剥片を複数検出した。111SIでは竪穴建物跡内の埋土には黒曜石の破片はわずかしこ含まれていなかったが、162SKの埋土には黒曜石・溶結凝灰岩の剥片を多く包含していた。

竪穴状遺構 100SI 竪穴状遺構100SIは、長軸3.91m、短軸2.87m、検出面からの深さ0.41mを測る。平面形状は方形だが、斜面下位の南西側は欠損している。柱穴は小口径の172・173・184SPが東側に並び、175・176SPが西側に並ぶ。これらとは別に156SKは平面形状方形で深さ0.8mを測る。156SKは竪穴内中央わずかに西に位置する。この規模から156SKは竪穴中央の柱として想定でき、これを南北方向の中央とした場合、谷側で欠損した100SIは南北5.0m、東西3.9mに復元できる。遺物は灰釉陶器の碗と皿が出土した。時期はO-53窯式期に当る。

100SI内の遺構 100SI内の遺構として、炉跡150SL、焼土集積151・152SU、土坑153・154・159・168SK等がある。100SIの埋土から鉄片・炭化物も多く検出されたことから、炉跡や焼土塊は金属加工に伴う作業を行っていたと考えられる。153・154SKは100SI北側壁面内に挟るように掘り込まれており、この形状はこれらの土坑の用途等によるものと思われるが、現時点では明確な理由は不明であり、今後の検討が必要である。

300SI 竪穴建物跡300SIは、残存状態で長軸4.37m、短軸1.48m、検出面からの深さ0.3mを測る。遺構の残存状態は概して悪く、北半部のみが残存した状況。柱穴は竪穴縁辺部分に巡り、竪穴内部には柱穴が検出されていない。縁辺部の柱穴は、西から338・340・339・350・352・353・354・361SPである。338SPを北限、361SPを南限とした場合は、北北西―西南南東に長軸4.7mを測り、東限を352SPとして石囲い炉300SLで反転した場合、東北東―西南西の短軸4.1mの建物跡に復元できる。残存する柱穴間は0.6m～1.1m。石囲い炉3001SLも北側3点の石は残存するも南側が欠損する。石囲い炉3001SLの南側欠損部分は、抜き取り穴の痕跡から2～3点の石が欠損しており、本来の形状は多角形であったと考えられる。

399SI 竪穴建物跡399SIは、300SIに先行して造成されていたと考えられる。300SIを掘削した結果、底面で炉跡と柱穴列が検出されたため別の竪穴建物跡と判断したものである。300SIは柱穴列が壁面に位置し、炉跡3001SLの側石が残存するのに対して、399SIの柱穴列は壁面がすでに無く300SIの底面で検出されたこと、炉跡3002SLの側石が全て抜けていることから、これらは300SIの掘削に伴い削平されたと考え、399SIが300SIに先行する遺構と結論づけた。残存状態の規模は長軸4.86m、短軸1.72m、検出面からの深さ

0.2mを測る。柱穴は、西から347・330・348・342・345・349・364・363SPがある。炉跡3002SLは、確実なものとしては底面の被熱部分のみが検出されている。300SIの埋土掘削中に3002SLの上部で礫3点が確認されたが、原位置に据わるものではないと判断した。柱穴の347・363SPが長軸方向の両端に位置すると仮定した場合、長軸方向の長さ4.86m、3002SLと北側の349SPを短軸の北半部と捉えて反転復元すると、短軸方向の長さ2.22mとなり、北西―南東方向に長軸を持つ竪穴建物跡と推定される。

3 2 6 S K 300SI(399SI)東半部で検出された土坑。平面上の切り合いでは300・399SIに後続して掘削され、竪穴建物跡とは併存しない。長軸0.97m、短軸0.95m、検出面からの深さ0.49mを測り、側壁はややオーバーハングする。検出された遺物には縄文土器や石器が見られるものの、これらは326SKが埋没する際に300SI・399SIの埋土が混入したものと考えられる。縄文時代以降の遺物は検出されておらず、300SI廃絶以降、それほど遠くない時期に掘削されたと考えられる。

3 0 2 S I 竪穴状遺構302SIは、長軸3.31m、短軸2.0m、検出面からの深さ0.45mを測る。遺構内埋土からの直接の遺物出土は無く、遺構の時期は、埋土が基本層序中で灰釉陶器を包含する層に類似することから平安期と判断した。柱穴は西から321・320・319・318・317SPが検出された。南側が現代の水田造成に伴って大きく欠損しており全体の規模は不明。

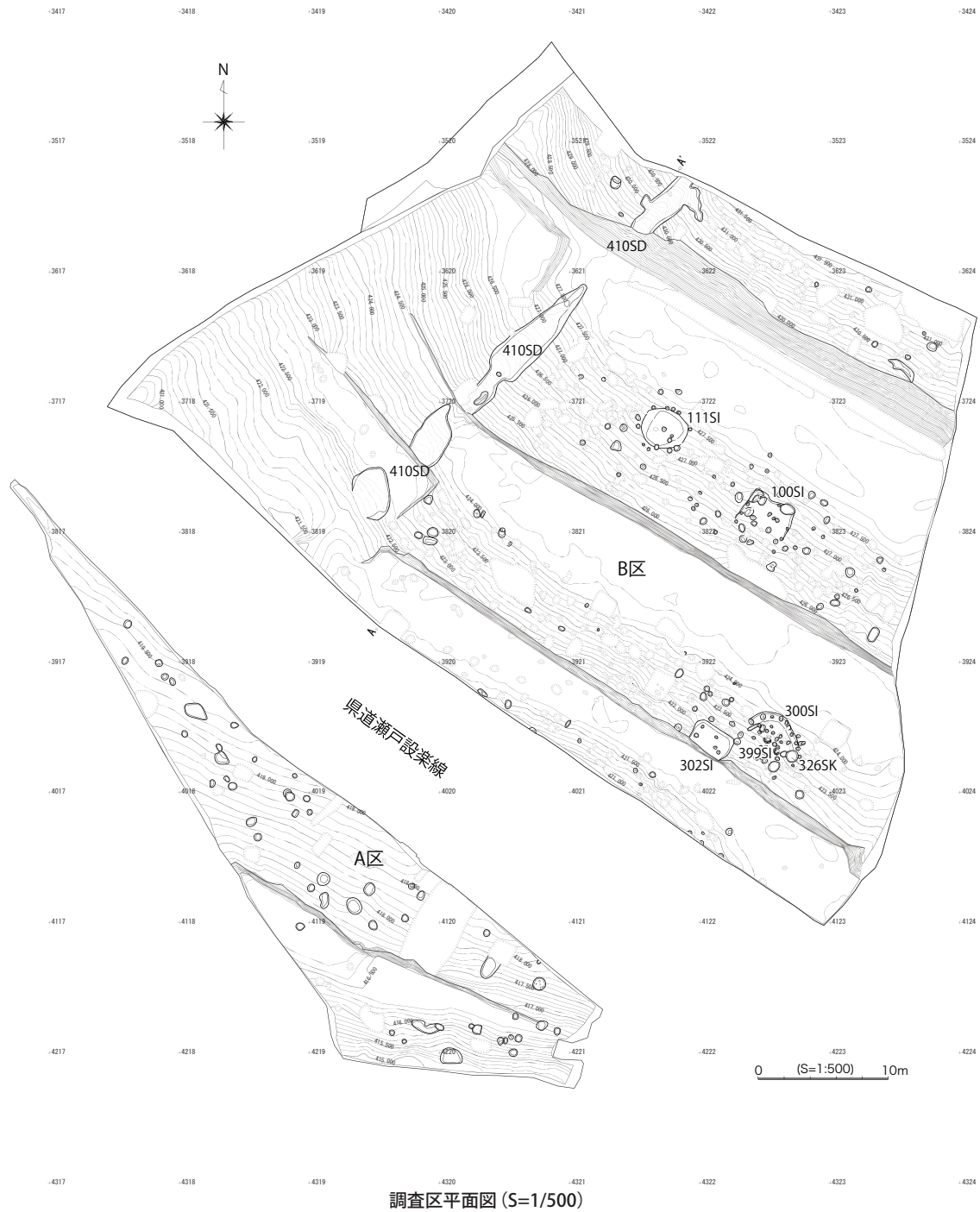
4 1 0 S D 410SDは、B区西半部で最上段の1段目から4段目まで検出された溝状の遺構である。現代の水田造成によって途切れた状態での検出となったが、標高と平面位置の状態から連続する遺構と判断した。層位は、上層から掘り込まれたことが明らかであり近現代の溝と考えられる。10月に開催した地元説明会では、昔の水田脇に410SDが流れていたという近隣にお住まいだった方のお話もあり、以前の水田や畑に水を供給した沢であった可能性が高く、遺構の時期は近現代であろう。

ま と め 胡桃窪遺跡の調査において主な遺構は、縄文時代は、前期後半の竪穴建物跡111SI、中期後半の竪穴建物跡300SI・399SIが、平安時代は中期の竪穴状遺構100SI、平安時代と考えられる302SIの合計5棟が検出された。これらはいずれも県道瀬戸設楽線の北側に設定されたB区で検出された。これは、元来が崩落、流出しやすい地質、地形であったことと、近現代の水田整備による切り土によって遺構面が滅失したことが原因で、限定的な検出状況となったと考えられる。その一方で、検出された遺構には、縄文時代前期後半の竪穴建物跡111SIや、平安時代中頃の竪穴状遺構100SIは設楽ダム関連遺跡調査の中で初検出(調査時点)された時期の遺構であり、これらは希少な遺構と考えることができる。

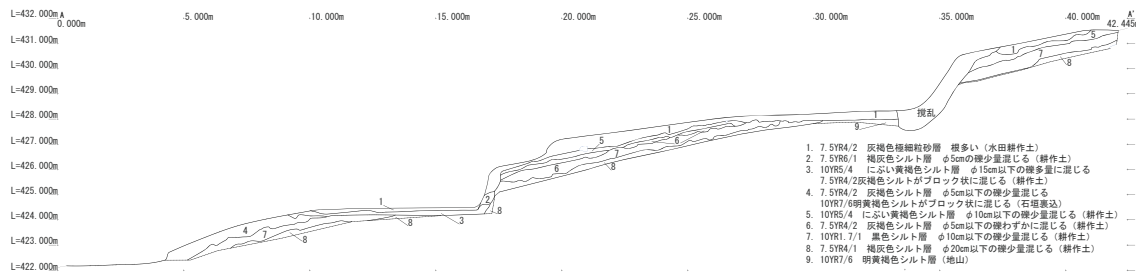
縄文時代前期後半や中期後半の竪穴建物跡に接近して、年代の大きく離れた平安時代の竪穴状遺構が検出されたことは、遺構が検出された調査区周辺の中では崩落等の影響が少なく、遺構検出面が辛うじて残存したことを示す。崩落の少ない場所を認識した上で竪穴建物跡や竪穴状遺構を構築する際に選地した可能性は高く、やや傾斜が強い調査区内でもB区周辺に遺構が集まって検出された原因の一つであろう。

平安時代の竪穴状遺構100SIは焼土や炉跡、金属片を伴うことから、鍛冶作業を行なったと想定したが、鍛冶滓などの出土は現時点で確認できていない。平安時代の竪穴状遺構で炉跡や焼土等を伴う事例は、豊田市栗狭間遺跡や奈良市尾山代遺跡にあり、これらは木材加工に関わる遺構とされている。そのため、当遺跡の竪穴状遺構100SIについても同様の目的が想定される。

(鈴木恵介)

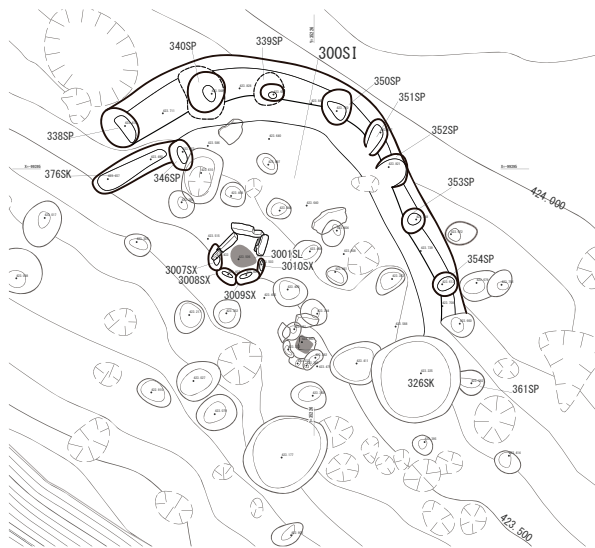


調査区平面図 (S=1/500)



B区断面図 (S=1/300)

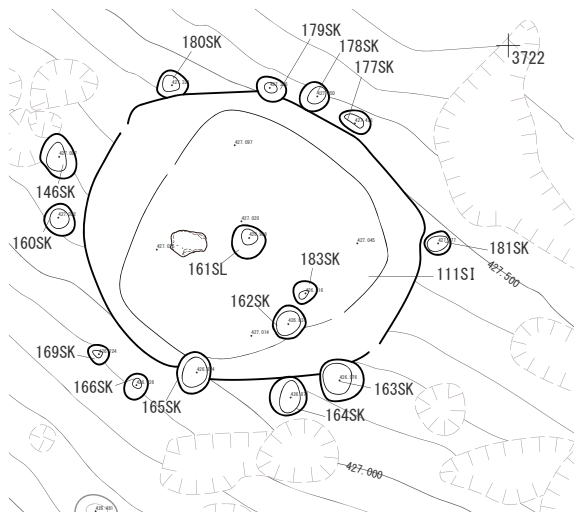
1. 7.5YR4/2 灰褐色極細粒砂層 堆多い(水田耕作土)
2. 7.5YR5/1 褐灰色シルト層 φ5cmの礫少量混じる(耕作土)
3. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト層 φ15cm以下の礫少量に混じる
4. 7.5YR4/2 灰褐色シルト層 φ5cm以下の礫少量混じる
10YR7/6明黄褐色シルトがブロック状に混じる(石垣裏込)
5. 10YR5/4 にふい黄褐色シルト層 φ10cm以下の礫少量混じる(耕作土)
6. 7.5YR4/2 灰褐色シルト層 φ5cm以下の礫わずかに混じる(耕作土)
7. 10YR1.7/1 黒色シルト層 φ10cm以下の礫少量混じる(耕作土)
8. 7.5YR4/1 褐灰色シルト層 φ20cm以下の礫少量混じる(耕作土)
9. 10YR7/6 明黄褐色シルト層(地山)



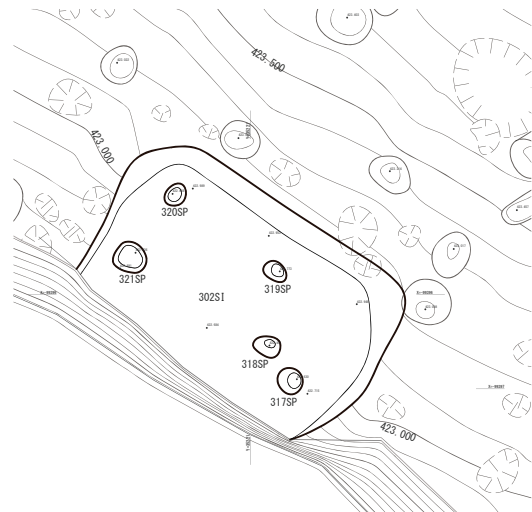
竪穴建物跡 300SI 平面図 (S=1/80)



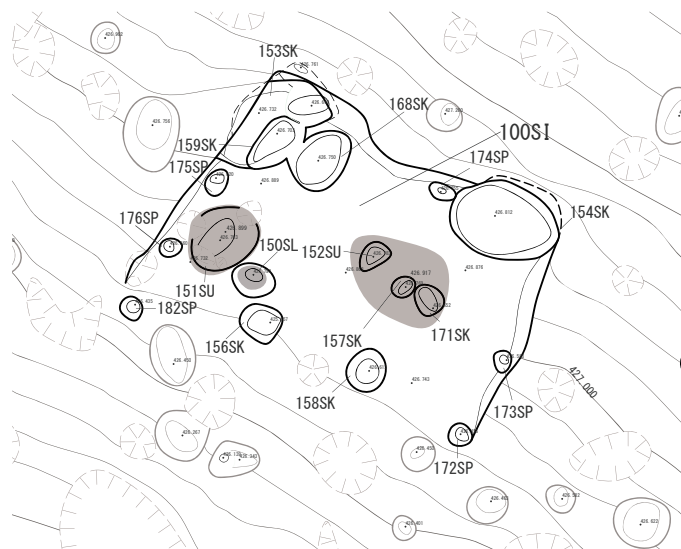
竪穴建物跡 399SI 平面図 (S=1/80)



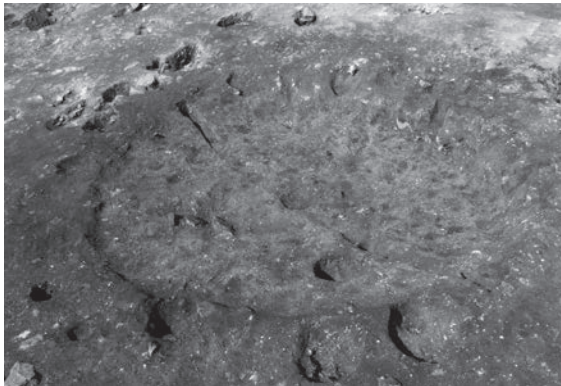
竪穴建物跡 111SI 平面図 (S=1/80)



竪穴状遺構 302SI 平面図 (S=1/80)



竪穴状遺構 100SI 平面図 (S=1/80)



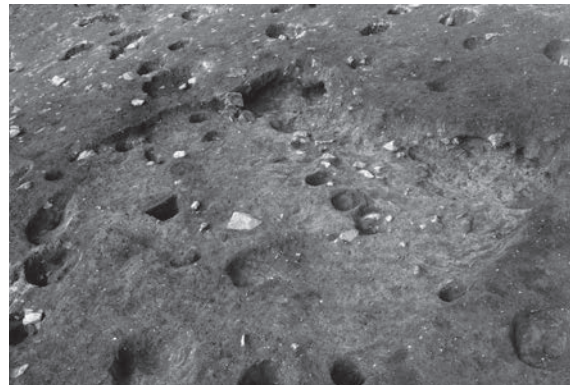
竪穴建物跡 111SI(南から・縄文時代前期後半)



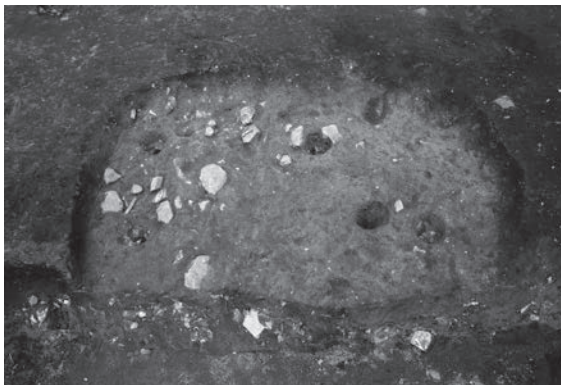
竪穴建物跡111SI出土土器(南西から・縄文時代前期後半)



竪穴建物跡 300SI・399SI(西から)



竪穴状遺構 100SI(南から)



竪穴状遺構 302SI(南西から)



B区全景(西から)



遺跡遠景(南西から)



遺跡全景(西から)